

蜂飼 耳さん インタビュー

令和六年度版小学校『書写』教科書は、詩人・作家である蜂飼耳さんが、新たに編集委員として参加。書写の教科書に「ことば」という観点から関わった経緯をうかがいました。

① 体の動きを言葉で助ける

—書写の教科書の編集というお仕事はいかがでしたか。
 楽しかったです。一定の条件の中で言葉を考えることが新鮮で、おもしろかったですね。

—新版教科書では、新たな試みとして、「ため」「はね」「はらい」などの筆使いを表す言葉が掲載されました。

「すうつ」「びたつ」「びよん」など、子どもたちの身体感覚として身につけている動きを擬態語で表すことによって、手の動

たる」など、おもしろいもの、かつ、大人になってからも聞き出すことのある代表的なものを選びました。

四年生は、春夏秋冬の句を一つずつ、小学生にもわかりやすい言葉で、句としても味わい深められるものという観点で、与謝蕪村や加賀千代女、小林一茶、正岡子規の俳句を選びました。

—秋の句の「きりの木や てきばきちつて つんと立」(小林一茶)は楽しいですね。書いているうちに覚えてしまいう子もいるかもしれません。

—書家の先生にうかがった運筆のポイントをもとに考えていただいたそうですね。

難しい作業でしたが、特に「はらい」の終筆で、鉛筆が少し離れる動きを表すのはかなり試行錯誤しました。何度も検討し、ようやく「すうつ」と かるく とびたつよ。」という言葉が完成しました。他にも、「曲がり」のしつかりゆつくりまわって動く動きを「のんびり『ぐるうり』」という言葉で表現するなどしました。

言葉や歌を自然と捉えられたいと思います。細かな動きを自然と捉えられたいと思います。

江戸時代の句ですが表現が斬新で、現代の小学生がこの句に接してもすぐに意味をとれますし、音も楽しいですね。

—六年生は谷川俊太郎さんの詩ですね。教科書の詩という「生きる」が印象深いですが……。

「生きる」は言葉の繰り返しが多いので、書写という観点から考え「こころの色」を選びました。小学生でも受け取りやすい言葉遣いで、これから中学生へと成長していく人たちに向けたメッセージにもなる内容です。特に「世界はみんなのこころで変わ

② 言葉の美しさを書いて味わう

—新版では、言葉の美しさを味わう「ことば」という教材が各学年に新設されました。どのように文章を選定されたのですか。
 さまざまな文字を書く体験ができるような作品、書く時間を楽しめる作品という観点で選びました。

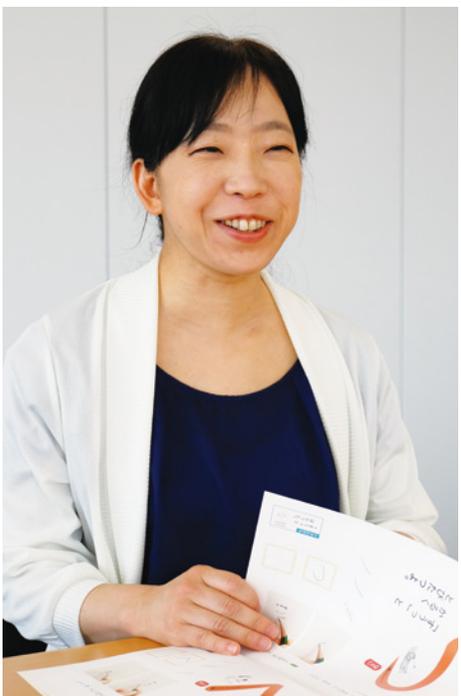
例えば、三年生のことわざは、「犬も歩けばぼうに当たる」や「石橋をたたいてわかる」という言葉については、子どもたちも考えてもらえたらと思います。

③ 余白のある文章を

—今回、多くの硬筆教材の文章を蜂飼さんに考えていただきました。
 現行版の文章を見直しつつ、必要に応じて新たに文章を考えました。例えば、二年生の書き初めは、情景を含んだ文章にする、書いていて風景が浮かぶ楽しさがあるのではないかと発想し、「空高く上がりました」という文を加えました。

—令和二年度版では、「きれいなはず日の出を見ました。新しい一年がはじまります。」という文章ですが、令和六年度版では、「はじめてたこ上げをしました。風をうけて空高く上がりました。」となりましたね。イメージが広がる文章です。

新版では、結論に閉じない、余白のある文章になっているかと思えます。小さくなっていく風が風にあおられて、見上げて眺めている景色が周辺に広がっていく。そうした時間や空間の余白を私自身も感じながら書きました。



蜂飼 耳

神奈川県生まれ。詩人、作家。光村図書小学校『国語』『書写』教科書編集委員。2000年『いまにもうるおっていく陣地』で第5回中原中也賞、2006年『食うものは食われる夜』で第56回芸術選奨文部科学大臣新人賞受賞。他の著書に絵本『うきわねこ』(ブロンズ新社)、エッセイ集『孔雀の羽の目がみてる』(白水社)、『秘密のおこない』(毎日新聞社)、『おいしそうな草』(岩波書店)、童話集『のろのろひつじとせかせかひつじ』(理論社)、小説『転身』(集英社)、書評集『朝毎読』(青土社)などがある。



▲3年「ことば」P36-37

——二年生の「原稿用紙の使い方」のソメイヨシノを取り上げた文章も、内容の広がりがありおもしろいですね。

書写の観点から、片仮名を含んだ文章にしてほしいという編集部からの依頼もあり、「ソメイヨシノ」をテーマに考えました。「ソ」や「シ」は、斜めの払いが難しい子も多いそうですね。

「桜」というと、薄いピンクのソメイヨシノをイメージしてしまいましたが、実は、白っぽい山桜もあるし、遅めに咲く八重桜もある。桜という日本文化を代表する花の背景にあるものも知ってほしいという思いも含めて書きました。

④ 特別な、書写の時間

——蜂飼さんにとって、子どものころの書写の時間は、どんな時間でしたか。

私にとって、書写の時間は、「墨の香り」でした。他の授業とは違う香りのする時間。その中で静かに落ち着いて、一文字一文字を書く。前後の授業とは切り離された特別な時間という感覚がありました。

そして、墨をするという行為。一人一人が手を動かして、硯の「海」と「陸」を行ったり来たりしている。その中で書の世界に徐々に入っていく空間が好きでした。

——子どもたちには、どんな書写の時間を過ごしてほしいですか。

今の生活は、手や指、手首を細かに調整しながら動かすという機会が格段に減ります。だからこそ、書写の時間に言葉を唱えながら手を動かしたり、さまざまな文章に触れたりしながら、書くことを楽しんでもらえたら嬉しいです。

そうした時間を、これからも言葉の面から補っていければと考えています。



▲令和6年度版小学校『書写』教科書